

## + 5 7 【ぎゅうじ】

これも巨大なおばけの話。  
話してくれたのは母親です。

昔々、この村を牛耳（ぎゅうじ）っていた牛のおばけがいました。  
大山が頭部で、中山が胴体で、小山が尻尾のおばけでした。  
あるとき、それはそれは美しい、村長の娘の花が、躑躅峠（つつじと  
うげ）で泣いていました。

「花よ、何故に、泣く」

通りかかった金太郎がききました。

母親にいわせると、この金太郎は、ぼくのご先祖さまだそうです。

「【ぎゅうじ】がわたしを嫁にしたいと、明日やってくるのです」

花はそうこたえました。

「【ぎゅうじ】の嫁なら幸せではないか」

金太郎がそうききますと、

「化物の嫁が幸せとは、金太郎どのは阿呆ですか」

「阿呆とは失敬な。わしは本音をいうたまでじゃ」

「わたしはかねてより金太郎どのに思いをよせております。わたしが嫁  
ぐのは金太郎どのおいて他にはございません」

花は涙ながらに訴えます。

金太郎は照れながらも、

「それならば是非もない。いよいよ【ぎゅうじ】を退治する時がきたの  
う」

しかし【ぎゅうじ】は巨漢（きょかん）のわりにすばしこく、花は囚  
（とら）われの身となってしまいました。

そこで金太郎は、なかよしの熊太郎にまたがり、まさかりを担いで、  
【ぎゅうじ】退治に行きました。

巨漢のわりに小心な【ぎゅうじ】は、金太郎の勇ましい姿をかいま見  
ただけで震えあがり、そのまま硬直してしまいました。

金太郎は【ぎゅうじ】を、頭部と胴体と尻尾の三つに寸断すると、花

を連れて帰りました。

金太郎と花は夫婦（めおと）になりました。

めでたしめでたし。

「ほんまかのう。めでたしかのう」

懐爺にこの話をして、感想を求めると、

「当たらずとも遠からず、です」

とこたえました。

「つまり、はんぶんはほんとで、はんぶんはうそ、ということかのう」

「いえいえ、これは昔々の話ですから、本当も嘘もありません。ただ、別の言い伝えもあります」

「それは、なんじゃ」

懐爺はいいにくそうでしたが、重い口をひらきました。

「金ちゃんのご先祖さまの話ですから、金ちゃんには黙っているわけにもいかないでしょう」

「あたりまえじゃ」

「じつは、別の言い伝えというのは、こういう話です。こよなく美しい村長さんの娘の花さんが、【ぎゅうじ】にぞっこんになってしまっ、（わしだってぞっこんになるかもしれん、とぼくはおもうのです）村長さんのみならず、村中で反対したのですが、それを押し切って家出をし【ぎゅうじ】のところへ行ってしまう。そこで村長さんは金太郎さんに、土下座してまで頼んで、（そんちょうさんが、どげざはせんわな）花さんを取りかえしてくれたら金太郎さんの嫁にすると、かたく約束をしたのでした。かねてより花さんを好いていた金太郎さんは、一つ返事で請け負って、熊太郎にまたがり、まさかりを担いで、【ぎゅうじ】退治にでかけたのです」

「なるほどのう。ちっともかわらんではないか」

「違いますよ。花さんが金太郎さんを好いていたのと、金太郎さんが花さんを好いていたのとでは、大変な違いではありませんか。それにもっと大きく違うのは、花さんは【ぎゅうじ】に囚われの身になったのではなくて、花さんのほうから進んで【ぎゅうじ】のところへ行ったのですから」

「うむ。わしには、おなじことに、おもえるがのう。おとことおんなの、はなしじゃろ。おとことおんなのはなしは、おたがいさまじゃ」

「どういう意味でしょう」

おやおや、懐爺はむきになっています。

「たとえばの、かいじい。はなさんはほんまは、【ぎゅうじ】よりも、きんたろうさんを、すいていて、きんたろうさんが、あほで、それにきがつかないので、すねて【ぎゅうじ】のところに行ったのかもしれん。それにの、よめにいったおんなは、まんず、だれでもとらわれのみ、みたいなもんじゃからのう」

「それならいいでしょう、この話の続きを」

あらあら、懐爺は益々むきになっています。

「いうてみい」

「金太郎さんの勇姿を見て、【ぎゅうじ】が震えあがって、そのまま硬直したなんてことはなかったのです。大切な奥さんを奪いにきた金太郎さんと、言語を絶する、壮絶（そうぜつ）で過酷（かこく）な闘いをして、（ぐたいてきにおしえてほしいのう、とぼくはおもいます）心も骨も砕けて敗れ去ったのです」

「それは、【ぎゅうじ】もあわれじゃのう。けんど、ふるえあがって、こうちよくして、かんたんにたいじされたほうが、もっとずっとあわれじゃのう」

懐爺はすねたのか、もう何もいいませんでした。

なぜか、ものおもいに沈んでいるふうにも見えませんでした。